

能登復興に係る広域連携ネットワークの構築

指導教員 金沢大学 講師 原田魁成（金沢大学ボランティアさぽーとステーション）

参加学生 2年 喜多見浩介 湯澤実柚 間山春太郎
金沢大学ボランティアさぽーとステーションメンバー

本活動の連携先である輪島ファーストペンギン様(重蔵神社様)には、我々の活動をいつも快く受け入れて下さり、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

また毎週のように被災地復旧・復興のためにご尽力されている、金沢大学ボランティアさぽーとステーションの皆さまに心からの敬意を表し、本事業を推進する上でも度々お力添えいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

金沢大学ボランティアさぽーとステーションの活動報告は以下の QR コードからご確認いただけます。

Instagram



Twitter



金沢大学 HP



能登復興に係る広域連携ネットワークの構築

金沢大学ボランティアさぼーとステーション
顧問 原田魁成(金沢大学 経済学経営学系 講師)
学生一同



■ 活動の概要

本事業では「能登復興に係る広域連携ネットワークの構築」をテーマに金沢大学ボランティアさぼーとステーション(以下ボラさぼと略す)の学生らと共に、**県内外の大学との連携支援活動や、地元団体及び住民と連携した心の支援活動を実施した。**具体的には早稲田大学や東洋大学らとの合同支援活動や同大学及び熊本学園大学、神戸学院大学での能登復旧・復興支援に関する活動報告及び学生間の交流活動などを行った。
また能登地域では輪島市で支援活動を続ける団体らの連合として「**輪島支援協働センター**」が組織され、金沢大学も同組織の一員として支援ニーズに関する住民アンケート調査や復旧支援、市内2か所の傾聴活動も開始した。

活動内容 (2024/1/1~2026/1/20)	参加人数
被災地での災害ボランティア	1198人
傾聴ボランティア	618人
その他(縁日運営、お祭り、農業、子ども支援等)	538人
合計	2,354人

■ 風化防止の能登文化の発信

- 2025年度中に**12回の支援活動報告**を実施
- ・早稲田大学や東洋大学、神戸学院大学、熊本学園大学での支援活動報告及び交流会の実施
- ・県外高校生との合同ワークショップの実施
- ・金沢市内の自主防災組織らとのワークショップの実施
- 全国各地での**能登復興市の開催(計6回)**
- 物販を通じて**能登経済の活性化**を促すとともに、**能登文化の発信**と現地の様子を伝える**啓蒙活動**を同時に実施した。



熊本県で地元大学生と能登復興市を開催する学生



能登半島地震発災以降の支援活動を行う学生



講演した学生たちの集合写真

■ 住民と協働した地元密着支援活動

- 少子高齢化に悩む能登での**若い力の活躍**
- 輪島市社会福祉協議会が開催する子ども食堂や、輪島市重蔵神社及び住吉神社が開催する祭事、地元支援団体が主催する縁日イベント(夏祭りや餅つき大会等)の運営等に**計44回**参加した。
- 住民と協働した**憩いの場の創出**
- 輪島支援協働センターの活動として、仮設住宅団地の集会所を用いて地元住民と共に実施する交流会を2025年11月より月2回、2026年1月からは月4回のペースで開催
- コミュニティの形成や孤立防止に貢献



子ども食堂に参加する子どもたちと交流する学生



地域のお祭りに地元の方や県内外の学生らと共に参加して盛り上げる



地元の方と一緒にサロンを開催して楽しくおしゃべりする様子

■ 農業を通じた創造的復興

- 農業を通じた**地域活性化**と関係人口の創出
- 輪島市門前町**七浦(しつら)**にて、震災及び水害により耕作が放棄された地を、住民会議にてその利用方法について意見交換を行ったうえで**地元住民や県内外の一般ボランティアと連携して再生**させた。
- そばの栽培から繋がる住民と外の人との輪
- 再生させた地でそばを栽培。**地元の方や一般ボランティアと共に**播種から収穫までを行い、年末には**地元の方や輪島市内外の子どもたちとそば打ち体験**をしながら**七浦産そば粉100%**の年越しそばをみんなで一緒に味わった。



住民懇談会で今後の町の再生について意見交換を行う様子



地元の方と市外の支援者で協働して耕作放棄地を再生



初めてのそば打ち体験をする子どもたち

■ 今後の活動予定

- 現地居住者や二次避難者向けの支援活動を継続実施
- 被災地は依然として復旧活動中であるため、**輪島支援協働センター**の活動を通じて現地ニーズを収集しつつ、大学間で連携して被災地に寄り添った支援活動を継続実施する
- 被災地の**風化防止**と防災力向上
- 能登復興に向けて、被災地の現状や現地のニーズ、能登半島地震の経験を踏まえた**防災の在り方**等について、**県内外への講演活動やワークショップ**などを積極的に実施
- 避難経路図の作成やマイタイムラインの作成**にも着手
- 関係人口流入の動機づくりと地域活性化
- 七浦を核として農作業を通じた新たな関係人口の創出を目指し、**第1次産業を通じた関係人口増加と地域活性化モデルの構築**を試みる



元旦に重蔵神社で被災者を追悼する竹灯籠を設置



地域資源を活用した復興に関するワークショップ



縁日に子どもも楽しめる企画を携えて参加する学生

■ 情報発信(ボラさぼ)



Instagram



Twitter



金沢大学HP
ボランティア活動



1. 活動の要約

本事業では「能登復興に係る広域連携ネットワークの構築」をテーマに、金沢大学ボランティアさぼーとステーション(以下ボラさぼと略す)の学生らと共に、県内外の大学との連携支援活動や、地元団体及び住民と連携した心の支援活動を実施した。具体的には早稲田大学や東洋大学との合同支援活動や、同大学及び熊本学園大学、神戸学院大学での能登復旧・復興支援に関する活動報告と学生間の交流活動などを行った。また能登地域では輪島市で支援活動を続ける団体の連合として「輪島支援協働センター」が組織され、金沢大学も同組織の一員として支援ニーズに関する住民アンケート調査や復旧支援、市内2か所の傾聴活動も開始した。

2. 活動の目的

令和6年能登半島地震及び令和6年奥能登豪雨に伴う被災地、及び被災者の方への継続的な支援を行うためには他団体との連携が不可欠である。また団体ごとに有する固有の強みを融合させることでより多面的な被災地普及、及び復興あるいは被災された方への支援が可能となる。従って各団体との合同ボランティア活動等を通じた連携ネットワークの構築と、それらの横の繋がりを活用した地域全体での防災力向上を活動の目的とする。

3. 活動の内容

能登復興に係る広域連携ネットワークの構築を行う上で、①大学間ネットワークを活用した能登半島地震被害の風化防止に係る、啓蒙活動及び能登経済活性化を目的とした物販活動(能登復興市)の実施、②地元支援団体と連携した地域密着型支援活動を重点的に実施した。また現地の支援フェーズの変化に伴い能登への関係人口を創出するための取り組みとして、③農作業を通じた外部支援者の受け入れと地元住民との交流に着手した。

4. 活動の成果

金沢大学ボラさぼを通じた被災地及び被災された方への支援活動実績は以下の通りである。なお下記の数値は2026年1月20日時点である。

- ・被災地災害ボランティア活動：1,198名、81回(輪島市を中心に七尾市、能登町、珠洲市など)
 - ・傾聴活動：618名、169回(金沢市、内灘町、穴水町など)
 - ・その他：538名(避難所支援やお祭り支援、農業支援、子ども支援、イベント支援など)
- 以上より合計2,354名の学生・教職員らがボランティア活動に参加した。

①風化防止に係る啓蒙活動及び能登復興市の実施

2025年度中には12回の支援活動報告を実施した。そのうち早稲田大学や東洋大学、神戸学院大学、熊本学園大学での支援活動報告及び交流会や県外高校生との合同ワークショップなどを計5回行った。交流会では現地で支援活動を続ける金沢大学ならではの現場ニーズと支援フェーズの変化について述べ、他大学からは同じく被災県として被災者に寄り添い続ける支援に関する意見や、非被災県ならではの遠隔による支援の可能性等について意見交換を行った。

また金沢市内で活動する自主防災組織らとの意見交換やワークショップなども計4回参加した。ワークショップでは支援活動を行う自らの防災力を問う議題や、地域全体の防災力向上に係る取り組み事例の意見交換を行った。

他に、能登の商品を取り扱った能登復興市も計6回実施した。物販を通じて能登経済の活性化を促すとともに、能登文化の発信と現地の様子を伝える啓蒙活動を同時に実施した。特に熊本県での能登

復興市では能登の海産物が好評であり、同じ被災県同士、復興に向けてたくさんの応援メッセージを頂戴した。



熊本県で地元大学生と能登復興市を開催する学生



支援活動報告を行う学生



支援活動報告を行った学生同士の集合写真

②地元支援団体と連携した地域密着型支援活動

輪島市を中心に、輪島市社会福祉協議会が開催する子ども食堂や、輪島市重蔵神社や住吉神社が開催する祭事、地元支援団体が主催する縁日イベント(夏祭りや餅つき大会等)の運営等に計 44 回参加した。また輪島支援協働センター*の活動として、仮設住宅団地の集会所を用いて地元住民と共に実施する交流会を 2025 年 11 月より月 2 回、2026 年 1 月からは月 4 回のペースで実施しており、地域コミュニティの形成や孤立防止、不安の解消などに貢献している。災害支援活動やイベント実施、交流活動のいずれにおいても「若い力」による地域活性効果が大きい。

※輪島支援協働センターは、輪島市内で支援活動を続ける団体らで組織された連合体で、輪島ファーストペンギン(重蔵神社)を筆頭に、金沢大学やごちやまるクリニック、NPO 法人じっくらあと、輪島復興支援団体リガーレ等、技術系支援や医療、子ども、地域包括支援など地元団体を中心とした組織である。2025 年 11 月 15 日から活動を開始し、仮設住宅及び在宅居住者への見守りや集会所を用いた交流会、お悩み相談会の実施など、地元団体ならではのきめ細かい支援を行っている。



子ども食堂に参加する子どもたちと交流する学生



地域のお祭りに地元の方や県内外の学生らと一緒に参加



地元の方と一緒にサロンを開催して楽しくおしゃべり

③農作業を通じた外部支援者の受け入れと地元住民との交流

輪島市門前町七浦(しつら)では令和 6 年能登半島地震及び令和 6 年奥能登豪雨災害の二重被災により、元々住民が管理していた土地が放棄されていた。そこで住民会議にてその利用方法について意見交換を行ったうえで地元住民や県内外の一般ボランティアと連携し、草刈りや草除け、トラクター等による耕運の末に利用可能な状態へ再生させた。その後、門前地区の名物の一種であるそばの実を播

種した。同土地で育てたそばは収穫の際にハザ干しをして乾燥させ、実と花を分離し、さらに地震の被害を免れた唐箕(とうみ)を使用してそばの実と塵を分離した。収集したそばは専用の機材でそば粉にし、年末には地元の方や輪島市内外の子もたちとそば打ち体験をしながら、地元のそば粉 100%の年越しそばを約 50 名の方々と一緒に味わった。麺の繋ぎとして小麦粉を使わず、自然薯を使用する門前そばは独特の歯切れで、地元の方々からも大変好評であった。



住民懇談会で今後の街の再生について意見交換をする様子



地元の方と市外の支援者で協働して耕作放棄地の再生に着手する様子



初めてのそば打ち体験をする子どもたち

5. 今後の活動計画

2026 年 1 月時点においても被災地は依然として復旧活動中であるため、輪島支援協働センターの活動を通じて現地ニーズを収集しつつ、大学間及び他団体と連携した支援活動の実施を行う。特に支援フェーズの変化に伴い、大人数による大規模型の支援よりは少人数で細く長く寄り添う支援が求められるようになっているため、遠隔からでも被災地及び被災者支援に携われる仕組みの構築にも着手する。加えて金沢等へ 2 次避難された被災者の方々への支援も継続して行う。

また被災地の風化防止及び能登復興に向けて、被災地の現状や現地のニーズ、能登半島地震の経験を踏まえた防災の在り方等について、県内外への講演活動を積極的に実施し、連携ネットワークを拡張させる。石川県内では自主防災組織らと連携して自分たちの生活拠点を中心としたマイタイムラインの作成や避難経路の確認、子どもたちへの防災教育などを実施するなど、地域全体の防災力向上を試みる。石川県外では現地のリアルなフェーズの変化に加え、能登半島地震や水害を踏まえて防災・減災の重要性を説く語り部の実施などを計画している。

さらに七浦を核として農作業を通じた新たな関係人口の創出を目指し、第 1 次産業を通じた関係人口増加と地域活性化モデルの構築を試みる。特に七浦地区には買い物施設や飲食施設等が十分にはないため、七浦を訪れた方が滞留できるような施設や仕組みを地元支援団体と連携して考える。



金沢に二次避難中の方々と金沢の畑で一緒に野菜を育てる



民間支援団体と地域資源を活用した被災地復興に関するワークショップを開催



地元の子もたちが楽しめる縁日イベントに学生も企画を携えて参加

6. 活動に対する地域からの評価

継続した支援活動を行っていることを背景に、本事業の連携先である重蔵神社が主として進めるまちづくり計画にも、金沢大学の学生や教職員を中心メンバーとして参画させていただくなど、今後も能登復興の主力として期待されている。また子ども支援活動や集会所等での交流活動、イベント運営の支援活動、能登復興市開催に係る地元の商人との交流を通じて、住民の方々から「金沢大学の学生や教職員はいつもよく頑張ってくれている」と評価を受けている。



元旦に重蔵神社で被災された
方を追悼する竹灯籠を設置



そば打ち体験に参加された
方々の集合写真



輪島市の盆踊りである三夜踊り
りに参加する学生ら